

## 鎌倉における『吾妻鏡』に記された陰陽師等の方位表記とその位置について (2)

玉林美男 (文化財課遺跡発掘調査研究員)

### 2. 明王院の位置

#### 明王院創建にかかる『吾妻鏡』の記事

明王院の創建時の位置については、『鎌倉市史 社寺編』<sup>註1</sup>には現所在地以外の記述はないが、鈴木千歳<sup>註2</sup>・鈴木良昭<sup>註3</sup>両氏は現在地と異なる考察をしている。両氏が明王院の位置について現在地と違う考証をする根拠は『吾妻鏡』文暦二年(1235)正月二十一日条によるが、今回も記述内容を確認するため、現代語訳を引用してみよう。

「二十一日、乙卯。御願である五大堂の建立について、相州・武州が何度も巡検して鎌倉の中の勝地を選ばれ、去年、城太郎の甘縄の地と決定したが、やはりふさわしくなく、たいそう思い悩まれていたところ、幕府の鬼門の方角に当たる場所があった。毛利蔵人太夫入道西阿の所領である。御祈禱にふさわしい場所ということで、この場所を指定され、すぐに地曳始が行われた。そこで今日、まず総門だけを建てられ、時房・泰時・大膳権大夫以下の数名が出向かれた。伊賀式部入道光西・清判官季氏らが奉行した。」<sup>註4</sup>とある。

ここでこの記事詳しく見てみたい。記事冒頭から地曳始が行われたまでは過去の経過を整理したもので、二十一日当日の記事は「そこで今日」以下の文章である。すなわち、五大堂の建立地決定に至る経過は当日の記録ではなく、経過として述べられているのである。その中に「去年、城太郎の甘縄の地と決定した」とあるが、それは『吾妻鏡』寛喜三年(1231)十月十九日条に「二階堂の御堂の地を甘縄に改め、城太郎邸の南、千葉介邸の北で、西山の側に決定された。」<sup>註5</sup>とあることを指すと考えられる。さらに毛利西阿の所領の地としたことについて、同貞永元年(1232)十月二十二日条に「將軍家の御願として、来年に五大尊堂を建てられる事について、まだその場所が決まっておらず、人々に命じてふさわしい場所を探されていた。毛利蔵人太夫入道西阿の所領である大倉の奥の地がよいとの審議があり、今日命により相州・武州が親職・晴賢・文元・珍誉・金蔵房らを伴ってその場に臨まれた。季光・撰津守・駿河前司・隠岐入道・後藤太夫判官・伊賀式部入道らも同じく参った。地形の優れていることは、このところ巡検してきたあちこちの場所を超えているとそれぞれが申した。そこでこの地にしようと思われたという。」<sup>註6</sup>と経過が述べられている。問題はこの文暦二年正月二十一日条の記事のうち、記事冒頭から審議があるまでの記事は堂の位置を決めた経過を記したもので、当日の記事ではなく、関連する資料があったのであろうが『吾妻鏡』の記事編纂時の書き込みとも考えられる。

#### 幕府・本所の考え方

まず、問題とされているのが、「幕府の鬼門の方角に当たる場所」(原文は『相當于幕府鬼門方』)という事柄である。これが堂の位置を考える鍵になるが、「幕府」とは、『吾妻鏡』文応元年(1260)四月二十六日条に「將軍の御居所を幕府といいます」<sup>註7</sup>とあり、「幕府」の地は本拠とされる御所だけでなく、方違の地や旅宿も含めているのであり、「幕府の鬼門の方角に当たる場所」を考える場合、それらを含めて考える必要がある。そこで堂の位置として参考にしたいのが『吾妻鏡』嘉禎元年(1235)正月九日と同二十日条である。

「九日、癸卯。晴。將軍家が節分の御方違で越後守(北条朝時)の名越の邸宅に入られた。この宿所は初めて入られるので、すべてに華美を尽くした。」

「二十日、甲寅。將軍家が御方違のため周防前司親実の大倉の家に入られた。明日、五大堂の門を建てられ

るので、天一神の方角を避けられたという。そうしたところ、これより先に御方違の方角について前漏刻博士宣友から訴えるところがあった。(中略)宣友が申した。『遊年の方角と大將軍・王相の方角とを区別するのは根拠のないことです』忠尚らが言った。『それぞれ別のことです。越州の御邸は御遊年の方角を避けられるためであり、親実の家は昨年より御本所として方違されてきました』<sup>註8</sup>。とある。さらに、「親実の家は昨年より御本所として方違されてきました」という記事がある。方違にあたっては、移動先の家が「御本所」とされるが、「本所 本来の居所。方忌は本所からの方角によって発生するので、寺院などに移りそこを仮の本所とすることが行われた」<sup>註9</sup>のであり、方違の起点とされ、そこに将軍が居る間は「幕府」と称されたのである。

この越後守は北条朝時であり、名越に館を構え、竹御所・頼家の方違先として利用されていた<sup>註10</sup>。その名越館は将軍の方違に際し、「幕府」と称されたのであろう。

### 明王院創建の起点となった御本所の位置

それではもう一度五大堂明王院の位置の問題に戻ってみよう。五大堂明王院の建立場所が「幕府の鬼門(艮)の方角」に当たるのは『吾妻鏡』にあるので、そうであったのであろう。ではその「幕府」の場所は何処であろうか。若宮大路の御所でないことは、そこでは現在の位置と「幕府の良」とする記事が合わないことから明らかである。鈴木千歳・鈴木良昭両氏は若宮大路の御所を前提として五大堂明王院の創建場所を探しているが、前述したように「幕府」は将軍の居所であるから、御方違された場所も考慮されなければならない。

『吾妻鏡』の記事を整理してみると、文暦二年(1235)正月九日に将軍頼経が北条朝時の名越邸に入り、同正月二十日に総門を建てるため周防前司中原親実の大倉の家に方違し、同正月二十一日に総門を建てている。このことから、方違していた北条朝時の名越邸を起点に明王院の方位が述べられていると考えられる<sup>註11</sup>。

越後守北条朝時名越邸はその死後、子息前尾張守北条時章に継承されたと考えられ、『吾妻鏡』正嘉元年(1257)八月一八日条から若宮御所の南の位置にあることが分かります<sup>註12</sup>、五大堂明王院との位置関係が追えそうである。そこでまず、前尾張守北条時章名越邸の位置を割り出してみよう。先述した大慈寺の位置の後、同日の記事には引き続いて「次に比企谷の山に行きました。御所と前尾州時章の名越の邸宅とは、見ましたところ南北です。先年、辰の方角と申したとのことですが、その時は十分確認しなかったのでしょうか」<sup>註13</sup>とあり、御所と名越時章の名越の邸宅の位置関係が「辰」すなわち東西方向ではなく南北方向であることを確認しているのである。

さて、北条氏の名越邸は鎌倉市材木座四丁目の弁ヶ谷にその推定地が求められる。この谷戸に名越北条氏創建と伝える名越新善光寺跡、北条高時創建の崇寿寺跡などがあったことで明らかである。北条時政の名越邸が一族に分割相続されたのであろう<sup>註14</sup>。『吾妻鏡』正嘉二年(1258)五月五日条には「来る二十九日、尾張前司の名越山荘[新善光寺辺]へ入られることをさだめられた」<sup>註15</sup>とあり、備前前司北条(名越)時章の山荘が名越弁ヶ谷の中にあつた新善光寺の付近にあつたことが分かる。新善光寺の位置は『鎌倉廢寺辞典』では図1のとおり材木座四丁目に推定地が求められている<sup>註16</sup>。鎌倉の大規模な谷戸造成は13世紀後半から始まると考えられているから、谷戸の奥ではなく、入り口に近いあたりが屋敷を想定するにはふさわしいのかもしれない。若宮御所と前尾州時章の名越邸は南北であるから、仮に新善光寺の推定地の開口部(西)側に前尾州時章の名越邸を求め、子午線で艮の方向に線を引くと、明王院境内・明王院の西側の谷、梶原屋敷付近から浄妙寺までがその範囲に入る(図2)。「明王院の西側の谷、梶原屋敷付近」について、『鎌倉廢寺辞典』「大慈寺」では「明王院の西には庭や堂跡のようなものがあるらしいが、これは『金沢文庫文書』にみえる明王院、あるいは五大堂の西谷(十ノ二十一頁・二四六頁)に相当するものと考える。」<sup>註17</sup>とある。明王院には苑池を有し、五大堂・金堂・

大塔・講堂・経蔵・北斗堂・観音堂・琰魔堂・惣門・楼門・鎮守春日社・稻荷社などの堂舎が存在し、西の谷には僧房があったというから<sup>註18</sup>、明王院の境内は現在梶原屋敷と伝わる明王院の西の谷を含めた区域とされよう。

起点となった北条時章の館の位置・明王院の位置、共に良いのではないかと思います。



図1 新善光寺と北条朝時邸  
『鎌倉廃寺事典』付図を参考に作成

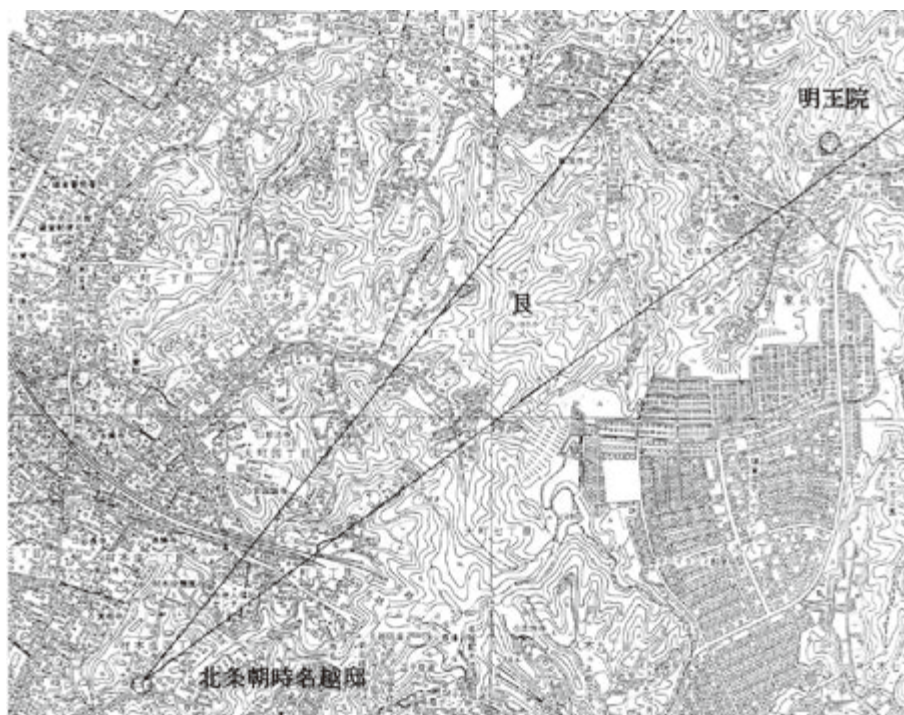


図2 北条朝時名越邸から良の方向

### 北条朝時名越邸と北条政村甘繩邸

また先の『吾妻鏡』正嘉元年（1257）八月十八日条には引き続いて「先年、辰の方角と申したとのことですが、その時は十分確認しなかったのでしょうか」とある、辰の方角は若宮幕府とされる場所からは東西方向にあたり、南北方向にはならない。子午線では名越大谷戸の北側であり、山稜ばかりであるから、この場合、軸線が若宮大路軸線（丑未線）であろうと若宮御所とは南北の位置にはならない(図3)。そうなる、考えられるのは方違した場所からの方位であろう。「前尾州時章の名越の邸宅」を「辰」の方角付近にとらえられるのは鎌倉市立御成小学校校庭で発見された今小路西遺跡北谷の館であろうか(図4)。そうであれば北条政村の甘繩邸ということになる<sup>註19</sup>。また、「前尾州時章の名越の邸宅」を「辰」の方角とした記事に「先年辰方之由申之云々。彼度不窮見歟云々」とあるのは方向を見窮めなかったのではなく、記録をよく見窮めなかったということであろう。



図3 若宮幕府の辰の方向

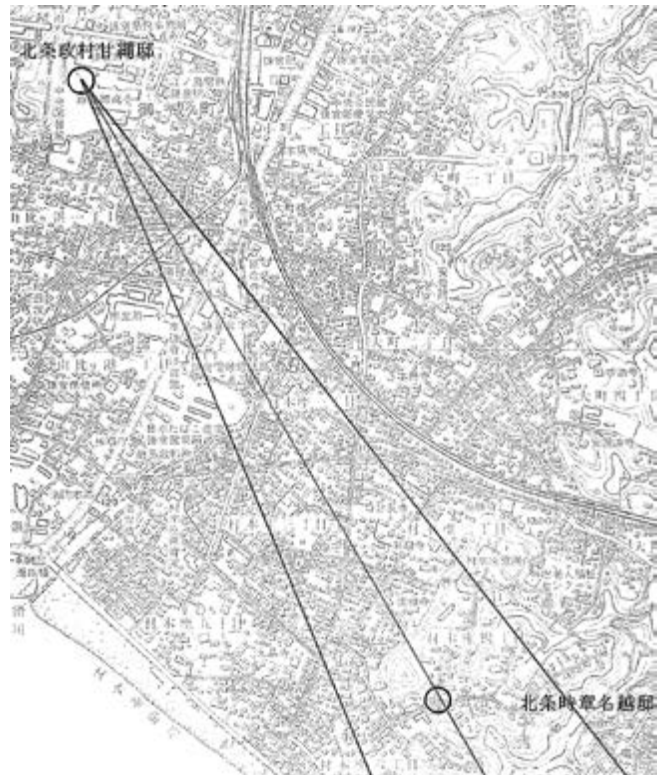


図4 北条時章名越邸と北条政村甘縄邸との関係

川副氏はこの記事を根拠として若宮大路を子午線に見立てる説を述べているが、是も根拠とならないことは明らかであろう。

### 明王院と大慈寺・鶴岡八幡宮の関係

本来五大堂の建てられた場所は毛利氏の所有地であったが、大慈寺に敷地を接するような位置にあった。明王院・大慈寺の供僧は鶴岡八幡宮供僧が兼ねていたことから、寺勢が衰えた室町時代後半以降、両寺の支配の統合が進み、明王院は大慈寺の政子十三年忌の丈六堂に隣接した地であったためこれとの関係を深めたと考えられる<sup>註20</sup>。大慈寺の別当・供僧は多く鶴岡八幡宮寺の『供僧次第』に現れることから、鶴岡八幡宮寺供僧が継承し、鶴岡八幡宮寺支配で十二所霧ヶ沢好見にあった月輪寺に大慈寺の名跡が継承され<sup>註21</sup>、寺地の支配等が行われたと考えたい。月輪寺については『鎌倉廃寺辞典』に詳しいが、『吾妻鏡』寛喜二年（1230）六月十八日条には北条時氏が死去し、大慈寺の側の山麓に葬られた記事がある。北条時氏の法号は「月輪寺禅阿」であるから<sup>註22</sup>、『吾妻鏡』貞永元年（1233）五月十八日条に三年忌を迎え、泰時が辨僧正定豪を導師としてその墳墓堂で新造阿弥陀三尊の供養を行っているので、この墳墓堂が「月輪寺」であったのではないだろうか。『鎌倉廃寺辞典』・『国史大辞典』（吉川弘文館）では北条経時の法号を「月輪寺安楽」としているが、『鎌倉市史 社寺編』「光明寺」では「経時の法名は位牌に蓮華寺殿安楽大禅定門とある」<sup>註23</sup>ので、「月輪寺」は北条時氏の「法号」であり、墳墓堂の寺号と考えるべきであろう。こうした明王院・大慈寺・月輪寺・鶴岡八幡宮寺との関係から、大慈寺の名跡が十二所の各地に伝わったのではないだろうか。

### 明王院の寺号

五大堂明王院は現在地付近に創建されたと考えてよい。「幕府の鬼門の方角に当たる場所」は將軍御方違の御本所となった北条朝時の名越邸の鬼門の方角に当たる場所と理解されよう。

寺号は『鎌倉市史 社寺編』「明王院」の項では「飯盛山寛喜寺明王院五大堂」と号するとされ、『新編鎌倉志』には俗に大行寺とよぶとみえている」と紹介されている。同書「大巧寺」（日蓮宗）では「寺伝によると大巧寺はもと大行寺と号した。真言宗の寺で十二所にあり、頼朝が軍の評議をしたところであるという。」とあり、明王院は大行寺と称していた傍証となる。「軍の評議」は軍議であり、寛喜に通じる。この伝承は寛喜をもじったものかもしれない。『新編鎌倉志』の記述を重んじれば、飯盛山「寛喜大行寺」明王院五大堂となり、巨福山「建長興国禅寺」に繋がる語順となる<sup>註24</sup>。いずれにしても明王院は鎌倉において年号を寺名に用いた最初の寺院であり、建長寺命名の前例となった寺院であった。これらの寺院が年号を寺号に用いることについて、特に反対の意見が上がった記録はない<sup>註25</sup>。

註1 貫達人「明王院」『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館 鎌倉市 初版1959年10月 第3版 1972年10月 188ページ

註2 鈴木千歳「鎌倉史蹟疑考」『鎌倉古絵図・紀行—鎌倉紀行編』東京美術 鈴木棠三編著 1976年6月 所収

註3 鈴木良昭「異説・明王院五大堂考—創建とその所在位置をめぐって—」『鎌倉』鎌倉文化研究会 第121号 2016年8月

註4 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡 10 御成敗式目』2011年5月 吉川弘文館 82～83ページ

註5 註4 前掲書 18ページ

註6 註4 前掲書 43ページ

註7 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡 15 飢饉と新制』2015年4月 吉川弘文館 91ページ

註8 註4 前掲書 81～82ページ

註9 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡 11 将軍と執権』2012年2月 吉川弘文館 220ページ 16

註10 『吾妻鏡』安貞元(1227)年十二月十四日条に「竹御所が御方違のため、越後守の名越の邸宅に入られたという」、暦仁元(1238)年十二月十九日条に「御所で節分の御方違について審議が行われた。遠江守の名越の宿所を用いられるよう、前武州が申されたところ(以下略)」、同二十三日条に「戌の刻に将軍家が御方違のため、遠江守朝時の名越邸に入られた。これは、このところの御本所である」、仁治二年(1241)二月二十二日条に「将軍家が御方違のため遠江守の名越邸に入られた」とある。安貞元年の記事は五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡 9 執権政治』2010年11月 吉川弘文館 144ページ

暦仁元年の記事は 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡 11 将軍と執権』2012年2月 吉川弘文館 42-43ページ

註11 明王院の造営については田井 秀「明王院五大堂造営に見る北条氏と三浦氏の確執」(『中世政治史の研究』阿部 猛編 日本史史料研究会 企画部 2010年9月 所収)があるが、ここでは方位の検討はなされていない。

註12 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡 14 得宗時頼』2014年3月 吉川弘文館 128ページ

註13 註12 前掲書

註14 玉林美男『特別講演 鎌倉の寺院遺跡について』第39回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨 神奈川県考古学会 2015年11月

註15 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡 15 飢饉と新制』2015年4月 吉川弘文館 29ページ

註16 貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺辞典』1980年12月 有隣堂

註17 註16 前掲書 136ページ

註18 坪内綾子「五大堂明王院の伽藍と縁起—「(五大堂記録)」を通して—」『鎌倉』第116号 鎌倉文化研究会 2014年1月

註19 鈴木 亘「御成小学校内発掘調査により検出された中世武家屋敷の建築」『鎌倉』第117号 鎌倉文化研究会 2014年8月

註20『鎌倉市史 史料編一』吉川弘文館 鎌倉市 1959年10月 272ページ。「明王院文書 六三三・六三四」に大慈寺新釈迦堂領であった武蔵国入間郡横沼郷の打ち渡しに関する文書を載せている。この文書について『鎌倉廃寺辞典』(前掲註16)は、大慈寺新釈迦堂と断ずることに躊躇しているが、伝来が明王院であることを信用すれば大慈寺とみてよ

いとしている(133~134 ページ)。この文書が明王院に伝わっていることは、明王院による大慈寺新釈迦堂(北条政子十三年忌供養の丈六堂) 支配の根拠となろう。

註 21 註 16 前掲書。こうした場合、「同宿」と表現されることがある。

註 22 『讀史備要』東京帝國大學史料編纂所編 内外書籍 1933 年 7 月初版発行・1935 年 10 月新訂五版 法號并稱號索引 1550 ページ

註 23 『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館 鎌倉市 1959 年 10 月 429 ページ

註 24 前掲『鎌倉市史 社寺編』188 ページに「寛喜の年号をとって、寛喜寺と号するのは、寛喜三年十月に將軍御願寺として建立することがきまっていたからであろう」と指摘している。翻って建長寺を考えた場合、建立当初は別にして建長四年に宗尊親王を將軍に迎えた後には將軍御願寺として建立されたのではないだろうか。

註 25 いずれの時期も幕府と朝廷が協調して政治に対していた時期であることは特筆されよう。(本郷和人『日本中世史の核心 頼朝、尊氏、そして信長へ』朝日文庫 朝日新聞出版社 2019 年 9 月)

### 3. 北条義時「大倉本亭」と「当時館」

#### 秋山哲雄氏説の「北条義時大倉亭」

北条義時の「大倉本亭」と「当時館」は秋山哲雄氏が「都市鎌倉の中世史 吾妻鏡の舞台と主役たち」で所在地を推定している<sup>註 1</sup>。そこでは、「鎌倉の拠点、大倉」と「義時の『当時の館』をさがせ」と題して北条義時亭の位置を推定している。

まず、大倉亭について。秋山氏は、まず、『吾妻鏡』寛喜三年(1231)正月十四日条「大倉観音堂の西の辺り、下山入道の家、失火す。余炎に依り、唐橋中將の亭ならびに故左京兆の旧宅に及ぶ。二階堂大路の両方の人屋等、焼けおわんぬ。」を引き、「大倉観音堂周辺の火災で焼けたのだから、この時に焼けた義時の旧宅は義時大倉亭と考えて問題あるまい。」と結論付けている。これに続き『吾妻鏡』貞応二年(1223)正月二十日条では、義時亭を西側の大路まで拡張する計画が出されている。(中略)大倉観音の西側で大路といえば二階堂大路しかない。(中略)したがって義時大倉亭は、二階堂大路に東側で面する地域であったことまでは特定できることになる」としている。さらに「義時は建保六年(1218)七月九日、この大倉亭の近くに大倉薬師堂を建立している。(中略)大倉薬師堂というくらいだから、この堂も大倉にあったはずだ。(中略)また覚園寺は大倉薬師堂を前身として建立されたという伝承が残っている。したがって大倉薬師堂は、薬師堂谷の入口付近に建立されたと考えるのが自然であろう。この位置は、義時の大倉亭とも接近している。」と述べている<sup>註 2</sup>。ここで秋山氏がイメージしている義時大倉亭は大倉御所の東側で、永福寺との間の地に存在すると考えているようである。

#### 二つの大倉亭

大倉に存在した義時の館は、『吾妻鏡』建保元年(1213)四月二日条に旧和田胤長屋地を北条義時が拝領し、金窪行親・安東忠宗に与えた荏柄天神前の館が最も御所に近接するものであろう。当時の荏柄天神社の位置もよく考える必要があるが、現在の位置と大きく変わっていないとすると、荏柄天神社の東側は薬師堂谷の入り口に近接している。一方、正治元年(1199)五月二十五日条に「江間殿の妾が男子を安産したという。加持祈禱のために鶴岡若宮の別当が昨夜から大倉亭におられた」<sup>註 3</sup>とある大倉亭は旧和田胤長亭であった大倉亭とは別ということになろう。すなわち、大倉亭は 2 ケ所あったと考えられる。秋山氏は正治元年の記事にある大倉亭を大倉御所脇に想定しているようであるが、正治元年の記事にある大倉亭の位置はどこになるのであろうか。

『吾妻鏡』貞応二年(1223)正月二十日条で西側の大路まで拡張する計画が出されているのは、荏柄前の旧和田胤長亭跡大倉亭(以下「荏柄前大倉亭」と仮称する)か、正治元年記事の大倉亭(以下「正治大倉亭」と仮称する)のどちらかであろう。

## 荏柄前大倉亭

そのうち「荏柄前大倉亭」は『吾妻鏡』建保元年（1213）三月二十五日条には「和田平太胤長の屋敷地は荏柄社の前にあった。御所の東隣なので、近習のものがそれぞれ頻りに望み申した」<sup>註4</sup>とあり、御所の東隣りであった。『吾妻鏡』文治元年（1185）九月一日条には「廷尉公朝が勅使として御所に参った。（中略）宿所は比企四郎の東御門の宅という」<sup>註5</sup>とあり、比企氏滅亡後、この館が和田氏に恩賞として与えられたのではないだろうか。筆者は既に大倉御所の推定地を荏柄天神社付近に想定した<sup>註6</sup>。これを是とすれば、源頼朝の大倉御所の東の限界は荏柄天神社の前よりさらに東であって、現在の清泉女学院の東を流れる川を東限とする従来の説とは大きく異なることになる。これを前提として貞応二年（1223）正月二十日条を引用して検討してみよう。「（前略）源進士実親を奉行として、奥州が人々に相談されることがあった。これは若君の御邸宅の西方の地がたいへん狭いので、西大路を庭に取り込んで築地を構えてはどうかという。隠岐入道・駿河前司などは、それがよいと申した。その上でさらに義時の大倉館に陰陽師らを招いて詳しく尋ねられた。（中略）それぞれの申すところはまったく一致しなかった。」<sup>註7</sup> これを読んで明らかなのは、「若君の御邸宅」と「義時の大倉亭」が分けて書かれており、場所が異なると推定されることである。確かに、『吾妻鏡』承久元年（1219）七月十九日条には「今日の午の刻、鎌倉に入り、右京権太夫義時朝臣の大倉の邸宅〔区画の南方にこのところ新造の建物を構えていた〕に到着した。」<sup>註8</sup>とあり、ここが三寅の御所となった。『吾妻鏡』承久元年十二月二十四日条には、「故右府將軍の邸宅〔現在は二品の居所〕が焼失した。失火という。そこで二品は急ぎ若君の邸宅に渡り、同宿するという。」<sup>註9</sup>とあり、三寅が大倉御所（故右府將軍実朝の御所）とは別の地に住していたことが分かる。この記事から、三寅入御に当たり、荏柄前大倉亭を三寅の御所（「若君の御邸宅」）として引き渡し、他に引き移っていたと理解されよう。「若君の御邸宅」が旧和田胤正邸を引き継いだ「荏柄前大倉亭」であったとすれば、その「西大路」は秋山氏が指摘する「二階堂大路」ではなく「故右府將軍の邸宅」、すなわち源実朝の大倉御所の東門に面した南北方向の道と考えることができよう。この道は現在の地図上には存在しない。また秋山氏は「義時大倉亭は、二階堂大路に東側で面する地域であったことまでは特定できることになる」としているが、二階堂大路は概略東西方向の道であり、これと東側で面することはあり得ない。「荏柄前大倉亭」は西辺を「故右府將軍の邸宅」の東門に面した南北道に、東辺を薬師堂谷口近くに存在した区画となるのではないだろうか。そうであれば、三寅の御所となった「右京権太夫義時朝臣の大倉の邸宅〔区画の南方にこのところ新造の建物を構えていた〕」と「義時の大倉亭」は別であることになる。

## 秋山哲雄氏の見解と泉ヶ谷亭

それではもう一つの「義時の大倉亭」—これは（正治大倉亭）と考えられるが—は何処にあったのだろうか。ここで参考になるのが、やはり秋山氏の研究である<sup>註10</sup>。秋山氏は「持仏堂的寺院 義時の『当時の館』をさがせ」の中で承久三（1221）年十一月三日条の義時室伊賀氏の産所を「当時住所」から「三条局の宅」に移す記事と、貞応二（1223）年正月二十五日条の「三寅のいる義時大倉亭の西方」にある義時の「当時の館」が「武州（泰時）に譲渡され」ていた記事を引いている。その結論の当否は後に述べるとして、この記事に従って地図上で検討したい。

まず、承久三年十一月大三日条を現代語訳で引用してみよう。「右京兆（北条義時）の妻室（伊賀氏）に産気があった。ところが少し憚りがあったので、普段の居所を改めようと陰陽道の者に相談したところ、権助（安倍）国道朝臣以下の五人が一致して意見を述べて言った。『三条局の宅がよいでしょう。そこは現在の住居から東方で、大倉の邸宅からは西北の方角です。現在の住居は武州に譲った所で、大倉の邸宅が本所です。』そこで去る晦日（二十九日）にそこで一宿した。そのため、四十五日以前にここから産所に移れば憚りはないとい

う。」<sup>註11</sup>とある。三条局宅にかかる原文は「三条局宅宜也件所者自當時住所東方分自大倉乾方也」である。

次に秋山氏は『三条局宅』をさがせの中で『吾妻鏡』承久元年(1219)二月四日条には、三条局の宅が備中阿闍梨という人物の屋地の跡をあてがわれたものであったことが記されている。」とし、『吾妻鏡』承久元年正月二十七日条には、『後見備中阿闍梨雪下北谷宅』とある」として、「義時の『当時住居』は、備中阿闍梨雪下北谷の屋地を与えられた三条局の宅の西側にあつたのである。」とした上で、それに引き続き、「厳密な位置は特定しがたいが、これまでの推測が正しければ、義時の『当時住所』は現在の建長寺から円覚寺にかけての一带ではないかと想定できるだろう」<sup>註12</sup>とし、それを『吾妻鏡』仁治二年(1241)十二月三十日条に北条泰時が源頼朝・北条義時の法華堂に参詣した後、「その後山内の巨福礼別居に渡り御ふ」とあるのを引いている。そしてこれらをまとめて「①義時『当時館』の東＝三条局宅＝備中阿闍梨雪下北谷屋地＝鶴岡八幡宮の北西部 つまり、義時の『当時館』＝鶴岡八幡宮北西部から見て西側＝山内の一带 ②義時『当時館』＝泰時『巨福礼別居』＝巨福山建長寺 ①と②は矛盾しない＝義時『当時館』の位置＝建長寺」としている。

### 『吾妻鏡』記事の図面化による検討

秋山氏の見解に従って若宮大路を南北軸線とし、乾の対局となる巽の方向を示したのが図5である。谷の入り口の起点をA、奥をBとして、巽の方角の範囲を示しているが、その範囲に入るのは、大御堂ヶ谷と釈迦堂ヶ谷、秋山氏の認める大倉御所の西側である。これは秋山氏の想定する大倉御所の東側区域には当たらない。同様の方向を子午線により表したのが図6である。谷戸の入り口部からは釈迦堂ヶ谷の入り口部、谷戸の中央部からは大倉御所の従来の推定地東側、荏柄天神社付近が相当する。

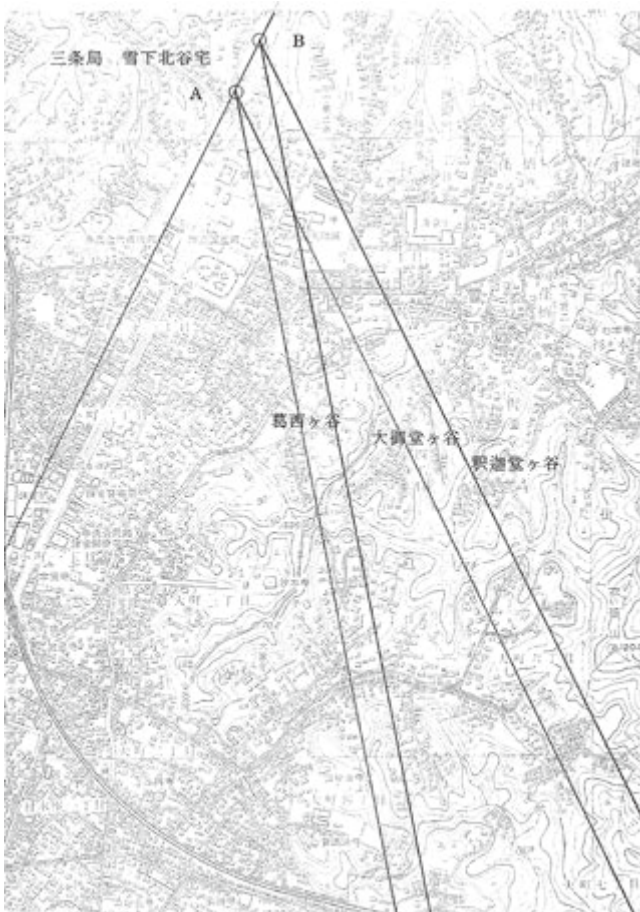


図5 若宮大路軸線 巽の方向

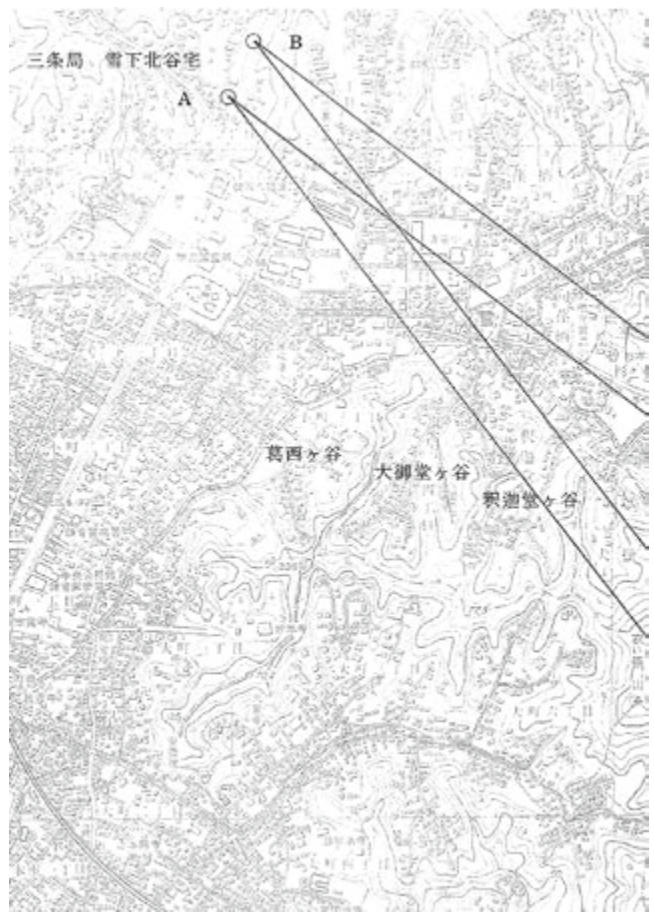


図6 子午線 巽の方向



秋山氏の見解については三条局宅＝備中阿闍梨雪下北谷屋地＝鶴岡八幡宮の北西部までは良いとしても、三条局宅は正確には谷戸開発がまだ十分行われていない時期であることを考えると、谷の入り口付近とすべきであろう。また鶴岡八幡宮二十五坊の西側は現在の扇ヶ谷、旧亀ヶ谷である(図7)。その中央付近には泉ヶ谷が存在する。ここでも秋山氏は方位盤の子午線を若宮大路と併せて考えられている<sup>註13</sup>が、先に述べた様に若宮大路を軸線とした説は成立しない。

鎌倉幕府滅亡直後に描かれた泉ヶ谷開口部の状況を示す重要文化財浄光明寺敷地絵図(図8)には「御中跡」の位置が示されており、これは得宗館跡とされている<sup>註14</sup>。浄光明寺敷地絵図に描かれた泉ヶ谷は北条義時の屋地が分割相続されたと考えられており<sup>註15</sup>、当該記事は得宗館が義時から泰時に伝領された由緒を示す記事とも考えられる。

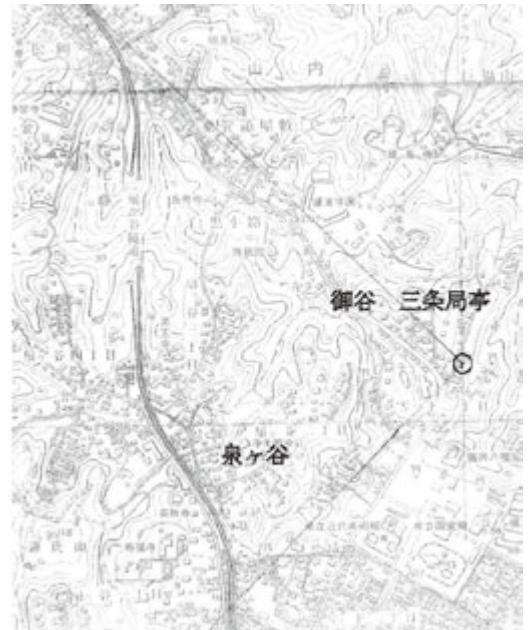


図7 御谷の西方向

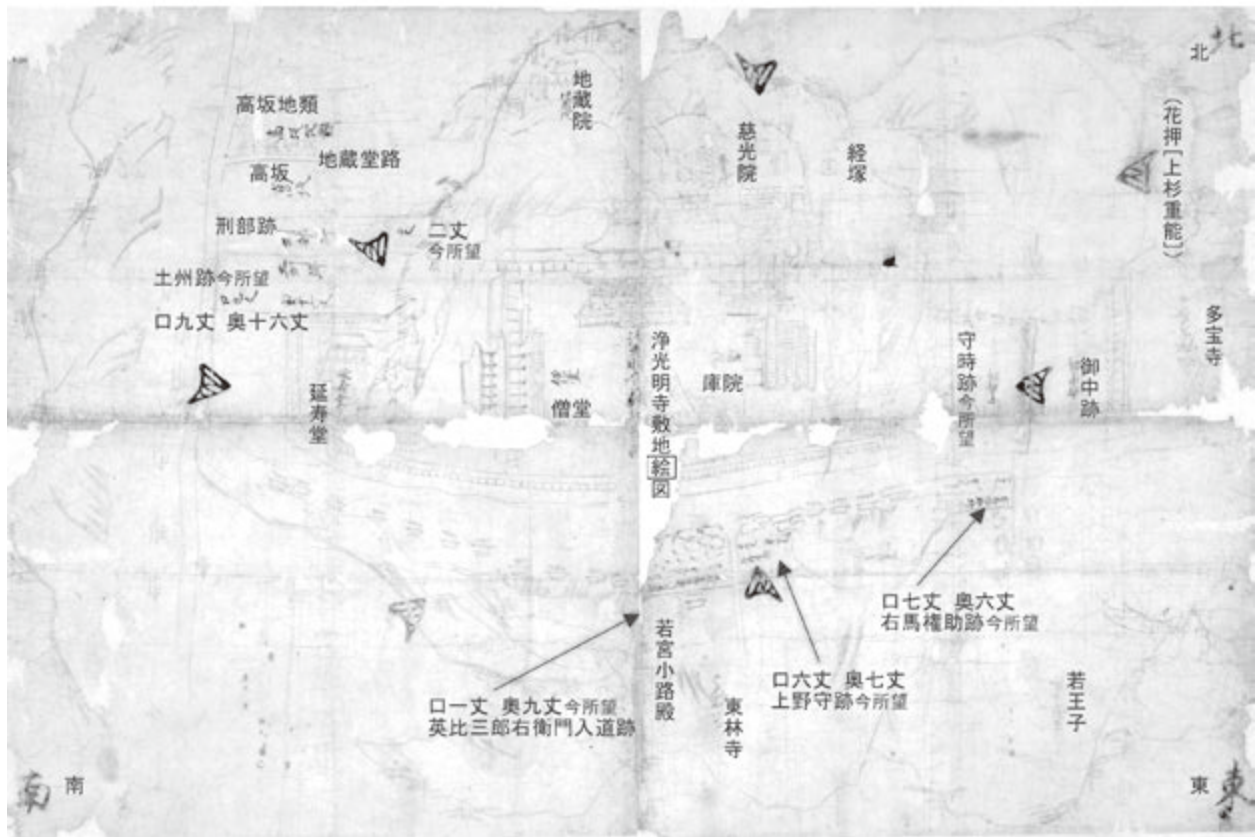


図8 浄光明寺敷地絵図 浄光明寺蔵

### 北条義時の大倉亭

次に「義時の大倉亭」の位置を見てみよう。前述した三条局の屋地はその「乾」に当たるといふ。三条局の屋地からは異なる。鶴岡八幡宮西側の御谷入口付近を起点に南北を子午線軸で設定し、巽の方角に当たるのは釈迦堂ヶ谷のほぼ入口部である。丑末線軸では葛西ヶ谷を通るがここを大倉とするわけにはいかないであろう。釈迦堂ヶ谷には元仁元年(1224)十一月に泰時が義時追福のために伽藍を建てており<sup>註16</sup>、この地の奥には

釈迦堂奥やぐら群があって東勝寺で自刃した北条一族を葬ったという伝承とやぐら群の絵図が宝戒寺に伝わる(図9)。現在も宝戒寺の寺地となっており、毎年、自刃した五月二十二日に供養が行われている。またこのやぐら群からは刀傷のある人骨や元弘三年(1333)五月二十八日銘の五輪塔地輪が出土し、ここで初七日の供養が行われたことが知られ、伝承と寺地伝承の正しさを証明している<sup>註17</sup>。このことから、釈迦堂ヶ谷が北条氏の所領であったことが知られ、もう一つの「義時の大倉亭」(正治大倉亭)は釈迦堂ヶ谷にあったことが推定される。そしてこれが「義時大倉本亭」であったろう。この推論に従って地図に示したのが図10である。義時は大倉の地の釈迦堂ヶ谷に本亭(「正治大倉亭」)を置き、大倉御所の東側に三寅の御所とした「荏柄前大倉亭」を所有していたことになる。寛喜三年(1231)正月十四日に焼失した「故右京兆の旧宅」がこれであろう。

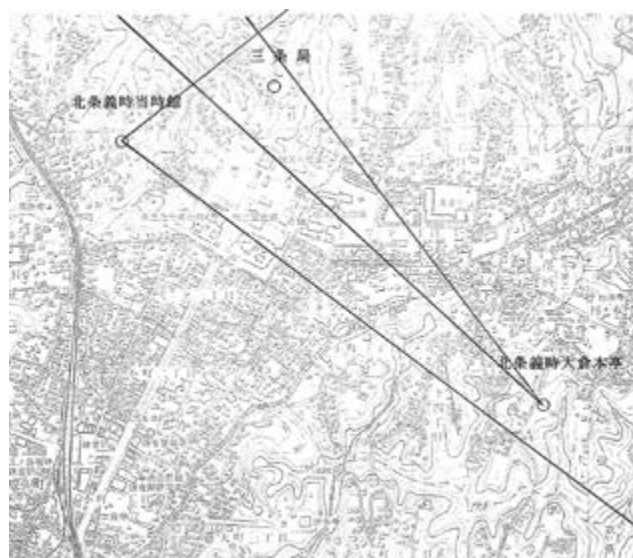
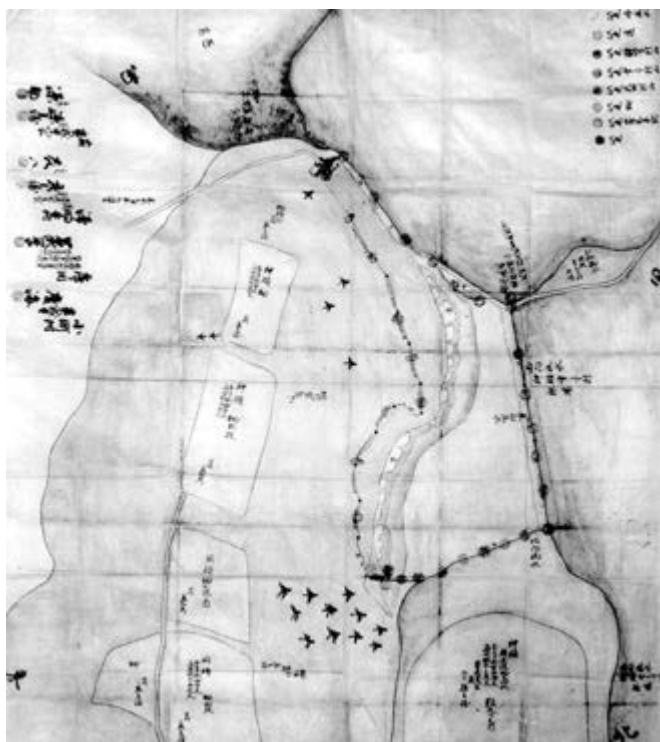


図10 北条義時大倉本亭と当時の館・三条局邸

図9 鶴岡八幡宮領・宝戒寺領并浄明寺村領地境界  
図 宝戒寺蔵

### 大倉薬師堂

北条義時は建保六(1218)年大倉薬師堂を建立する。『吾妻鏡』建保六年七月九日条には、「未明に右京兆が大倉郷に渡られた。南の山裾に適当な土地を選んで一堂を建立し、薬師像を安置するという。」<sup>註18</sup>これは「渡御大倉郷於南山際、ト便宜之地、建立一堂、可被安置薬師像」の訳であるが、南の山際とあり、館の南にある山の際と理解され、南に開口する現在の薬師堂ヶ谷ではないことは明らかである。釈迦堂ヶ谷は北向きの谷であり、大倉薬師堂も自己の所領であった釈迦堂ヶ谷で土地をトして建立されたのであろう。北条貞時は永仁四年(1296)、大倉薬師堂を移して覚園寺を創建するが<sup>註19</sup>、覚園寺の主峰で、「法王窟」のある鷲峰山は釈迦堂ヶ谷の北、山ノ内得宗館が推定される最明寺(明月谷)の東に当たる。

『鎌倉廃寺辞典』では『上杉系図』に朝宗を釈迦堂管領と号すとみえる。犬懸の上杉氏である。この釈迦堂は字銘であろう<sup>註20</sup>としているが、上杉氏は時頼亭であった最明寺の地にも館を構え、山内上杉氏の根拠地としているから、義時の釈迦堂すなわち得宗館を引き継いで釈迦堂を冠したのかもしれない。

### 荏柄天神周辺の南北の道・溝

それでは「荏柄前大倉亭」は何処にあったのであろうか。そこで参考になるのが鎌倉市二階堂字荏柄 38 番 2

の調査結果である<sup>註21</sup>(図 11)。この遺跡は荏柄天神社参道の西側に接して存在し、ここでは奈良・平安時代の集落跡を壊して 10 世紀後半ごろに新田開発が行われた跡が検出され、中世になると 12 世紀末から 13 世紀の掘立柱建物・礎石建物群が検出されている。さらに建物群と重複して荏柄天神社の旧参道が検出されている。この参道は他の調査地点で 13 世紀中頃に造られ、15 世紀頃まで存在したことが確認されており、この遺跡が廃絶した後に荏柄天神社参道が整備されたことが分かる。現在の参道は、後北条氏による荏柄天神社再建に際して整備されたものであろう。この遺跡の建物の方向は北から約 3 度東にずれている(図面から筆者が計測)。



図 11 二階堂字荏柄 38 番 2 遺構配置図(中世 3 面)

大倉幕府周辺の発掘調査の所見をまとめた特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所の第 5 回歴史講座『「大倉地域を学ぶ」資料集』において、斎木秀雄氏は「大倉地域の発掘調査」の「まとめ」の中で「縄文時代以降大倉幕府が推定されている地域は居住に適さない場所であった」「中世以前では地点 10 で確認された 11 世紀代の堀で囲まれた空間の存在が最も重要であると考えている。この空間は荏柄天神社の西下一帯に存在した可能性が高い。11 世紀の屋敷的な空間や 10 世紀の村落内寺院の可能性などを考えると、大倉地域の解明と同時に荏柄地域の解明が重要である」と述べている<sup>註22</sup>。地点 10 は二階堂字荏柄 38 番 2 地点である。

この時期の建物の方向がほぼ東西南北であることは大倉幕府の推定地周辺では一般的にみられることから、大倉幕府周辺の遺跡では建物の方向が東西南北であり、そのため連続する館群では南北方向あるいは東西方向の区画、それに沿った東西・南北の道の存在が予測される。

この遺跡の南西、荏柄天神社参道の東側に存在する二階堂字荏柄 9 番 1 の調査<sup>註23</sup>では調査区の東端で南北方向の道と側溝が検出されており、その北側に接して現在でも南北方向の道があり、二階堂大路に至って途切れているが、その延長線は荏柄天神社の社当に至っている。道路状の遺構は第Ⅱ期～Ⅳ期に相当し、側溝を伴う。道路状遺構は鎌倉で採集される軟質の泥岩(土丹)を敷き詰め、版築したものである。側溝は幅 30 cm ほどの小規模のものであったと報告されている(図 12)。道路状遺構が確認された第Ⅱ期は 13 世紀末～14 世紀前半代、第Ⅲ期は 14 世紀中頃から 15 世紀前半代、Ⅳ期は 15 世紀中頃～16 世紀初頭に比定されている。大きな区画を分割されたときにできる小道と考えられ、13 世紀末以降とされるが、この地域に南北方向の道が存在することは確認できるであろう。ちなみに、周辺の発掘調査では、建築址の方向は東西・南北である。



図 12 二階堂字荏柄 9 番 1 遺構配置図

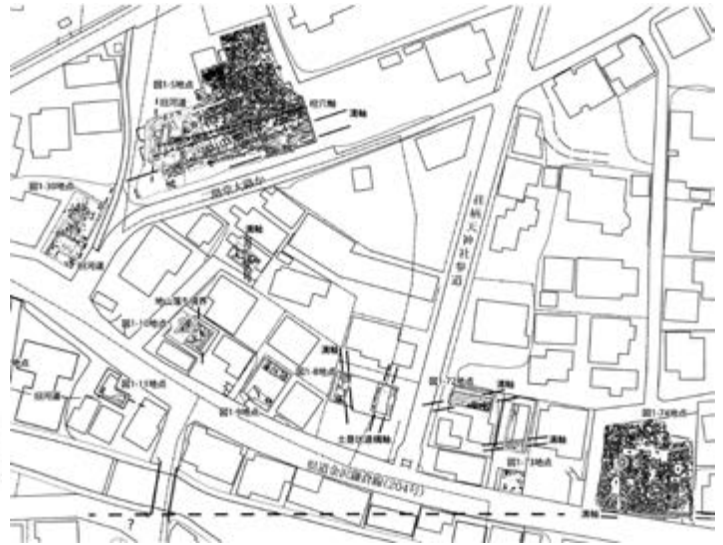


図 13 荏柄天神社参道周辺の遺構

この状況について沖元道氏は雪ノ下字天神前 562 番 30 地点、雪ノ下字大倉耕地 565 番 4 地点、二階堂字荏柄 10 番 1 地点、同 10 番 6 地点、9 番 1 地点の調査では現況と大きく異なる軸方向を持つ意向が確認されており、この軸方向は 13 世紀中葉を中心とする時期まで存続している可能性を指摘できるとし、さらに二階堂字荏柄 9 番 1 地点の北側道路遺構と軸線がほぼ同一となっていることは注目すべきことと指摘している<sup>註 24</sup>(図 13)。

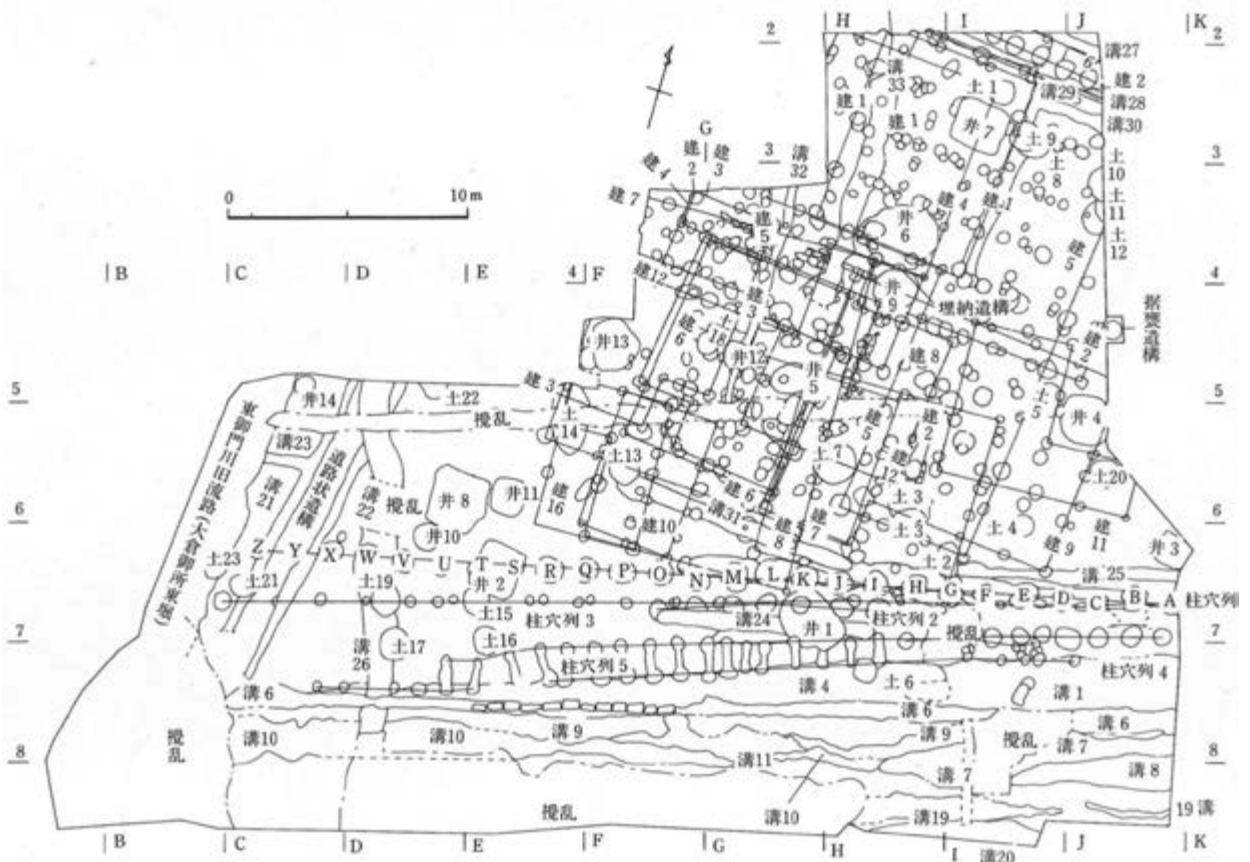


図 14 二階堂字荏柄 38 番 1 遺構配置図

荏柄天神社の南側では、建物の方向性と合わせ南北方向の道が存在することが推定されるのである。二階堂字荏柄9番1地点で検出された道のさらに東側に古い道が存在している可能性もあろう。そうであればそれが「荏柄前大倉亭」の西にある道であり、『吾妻鏡』貞応二年（1223）正月二十日条に現れる、義時亭を西側の大路まで拡張する計画が出されている記事に対応する道と考えることができるかもしれない。すなわち荏柄天神社の東付近から南に引いた線の東側が北条義時の荏柄前大倉亭であり、道を挟んで西側が大倉御所ということになる。

清泉小学校南東に位置する二階堂字荏柄38番1の調査では東御門川に並行する鎌倉時代前期の南北溝・二階堂大路に並行する溝と柱穴群・南北方向の掘立柱建物群が検出された(図14)。南北溝を大倉御所の東側の区画溝と考える向きもあるが、西の区画溝と考えても良いであろう。いずれにしても南北方向の区画溝が存在することは事実である<sup>註25</sup>。先の二階堂字荏柄38番2の遺跡と共に大倉御所の内部ということになるのではないだろうか。そう考える事ができれば、二階堂字荏柄38番1で確認された建物群は政所であるかもしれない<sup>註26</sup>。

- 註1 秋山哲雄「北条氏の邸宅をさがせ 鎌倉の拠点、大倉」と「持仏堂的寺院 義時の『当時館』をさがせ」『都市鎌倉の中世史 吾妻鏡の舞台と主役たち』吉川弘文館 2010年8月
- 註2 註1前掲書68ページ。『吾妻鏡』に登場する薬師堂谷は北条義時建立になる薬師堂の所在する谷ではない。北条貞時が現在地に移す以前、『吾妻鏡』建長三年十月小七日条に「薬師堂ヶ谷焼亡し、二階堂大路の南へ延ぶ」とある。
- 註3 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡6 富士の巻狩』2009年6月 吉川弘文館150ページ
- 註4 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡7 頼家と実朝』2009年11月 吉川弘文館183ページ
- 註5 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡2 平氏滅亡』2008年3月 吉川弘文館133ページ
- 註6 永福寺を御所の鬼門、法華堂を御所の天門と仮定し、周辺の考古学的な調査の所見から大倉御所の位置を荏柄天神社の下付近と想定した。玉林美男「方位から見た大倉御所（試論）」『かまくら考古』第37号 特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所 2018年6月
- 註7 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡9 執権政治』2010年11月 吉川弘文館12ページ
- 註8 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡8 承久の乱』2010年4月 吉川弘文館87ページ
- 註9 註8前掲書93ページ
- 註10 秋山哲雄「北条氏の邸宅をさがせ 鎌倉の拠点、大倉」と「持仏堂的寺院 義時の『当時館』をさがせ」『都市鎌倉の中世史 吾妻鏡の舞台と主役たち』吉川弘文館 2010年8月
- 註11 註8前掲書152ページ
- 註12 註10前掲書102・103ページ
- 註13 註10前掲書15ページ
- 註14 石井進「『浄光明寺敷地絵図』に記された人物は誰か」『浄光明寺敷地絵図の研究』大三輪龍彦編 2005年7月 新人物往来社
- 註15 大三輪龍彦「『浄光明寺敷地絵図』の世界」『鎌倉の時代』福田豊彦・関幸彦編 山川出版社 2015年1月 332ページ
- 註16 貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺辞典』1980年12月 有隣堂 「釈迦堂」48・49ページ
- 註17 大三輪龍彦『鎌倉のやぐら もののふの浄土』1977年4月 かまくら春秋社
- 註18 註8前掲書62ページ 覚園寺の前身となる大倉薬師堂である。
- 註19 『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館 1959年「覚園寺」項166ページ
- 註20 貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺辞典』1980年12月 有隣堂 「釈迦堂」48ページ
- 註21 斎木秀雄「大倉幕府周辺遺跡の調査」『第22回 鎌倉遺跡調査・研究発表会 発表要旨』2012年8月 特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所、鎌倉かわらけ研究会編「3. 大倉幕府周辺遺跡の調査概要」『鎌倉かわらけの再検討 — 大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から —』2016年3月
- 註22 斎木秀雄「大倉地域の発掘調査」『特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所第5回歴史講座『大倉地域を学ぶ』資料集』2013年11月 特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所

註 23 『神奈川県鎌倉市 横小路周辺遺跡発掘調査報告書—二階堂字荏柄 9 番 1 地点—』横小路周辺遺跡発掘調査団 1991 年 3 月

註 24 沖元 道「2. 本調査地点と周辺の調査成果より」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 32 平成 27 年度発掘調査報告書(第 2 分冊) 大倉幕府周辺遺跡群 (No. 49) 雪ノ下天神前 562 番 30 地点』所収 鎌倉市教育委員会 2016 年 3 月

註 25 沖元 道氏は周辺の遺跡の状況から、大倉御所建設以前から東御門の谷からの流路の可能性を指摘している。沖元 前掲書

註 26 『吾妻鏡』建保元年五月小二日条に「御所西南政所前」とある。

#### 4. 小山下野入道生西(朝政)邸

小山朝政邸は車大路と若宮大路にあったことが『吾妻鏡』に見える。場所が特定できるのは『吾妻鏡』安貞二(1228)年三月二十五日条、同年十月十五日条、嘉禎二年(1236)四月小四日条、同六月二十六日条にあり、それを引き継いだと考えられる小山長村邸についても建長四年(1252)五月十七日条、文応元年(1260)十一月十八日、同二十二日条にある。車大路邸については『吾妻鏡』安貞二年三月二十五日条、同年十月十五日条、建長四年五月十七日条。どちらか検討が必要なのが嘉禎二年六月二十六日条。若宮大路邸については嘉禎二年四月小四日条、文応元年十一月十八日、同二十二日条である。

以下、車大路と若宮大路、要検討の邸宅について分けて整理してみたい。

##### 小山氏車大路邸

まず、車大路邸についてである。『吾妻鏡』安貞二年十月十五日条には「將軍家(藤原頼経)が小山下野入道生西(朝政)の車大路の家に入られた」<sup>註1</sup>とあり、建長四年五月十七日条には將軍宗尊親王の御方違についての評議が行われ、「そこで出羽前司(小山)長村の車大路の邸宅に定められたという。(長村邸は)現在の御所の正南の方角に当たる。」<sup>註2</sup>とある。安貞二年三月二十五日条であるが、「將軍家が御方違のため、小山下野入道生西の宿所に入られた。御所から南の方向にあたる」<sup>註3</sup>とあり、建長四年五月十七日条と方角が一致するのでここに含めた。建長四年五月十七日条の御所は小町大路辺にあった北条時頼邸である。この場所を秋山哲雄氏は宝戒寺のある場所とされているが<sup>註4</sup>、秋山氏が根拠とした『吾妻鏡』建長四年四月一日条では小町大路の西側にあった鶴岡八幡宮前か、東側にあった宝戒寺境内か特定できない。このため、両者とも候補として検討することにした。安貞二年三月二十五日条の御所は嘉禄元年十一月小七日から木作始が行われた宇津宮辻子御所である。小山氏の車大路邸の位置を特定できるのは建長四年五月十七日条であるので、これを示したのが図 15 である。この図には併せて安貞二年三月二十五日条の範囲を加えてある。安貞二年三月二十五日条では宇津宮辻子御所の位置が問題になるが、作図してみた限りでは、起点位置が多少動いたとしても若宮大路沿いの屋敷地推定地には領域がかかることはない。小山氏の車大路邸は起点を宝戒寺境内とすると大町四丁目安国論寺西側の町二丁目区域から材木座二丁目長勝寺付近、鶴岡八幡宮前を起点とすると大町二丁目の安養院前から材木座二丁目来迎寺付近ということになり、車大路をどの辺に推定するかということになる。安養院前は大町大路であり、まちの中心区域であるから除外する。長勝寺の前面北側に接する道路は発掘調査により 15 世紀には存在していたことが推定され<sup>註5</sup>、この道に南面していたか、逆川沿いの町二丁目本興寺北側の道に北面していたかが想定される。この両者の道は、南側の長勝寺前の道は現在は寸断されているが、由比若宮社の北側を通り、本興寺北側の道路も由比若宮の北側を通り各々逆川を渡る。この道の間は砂丘の頂上部に当たる。その渡河地点は同一で、先は下の下馬橋に通じていたのかもしれない。大町大路とは別のルートで、古東海道のルートと推定されている。いずれにしても逆川の南岸から JR 横須賀線の線路敷きの両側付近ということになる。

それでは嘉禎二年(1236)六月二十六日条はどうかであろうか。口語訳では「明日、新御所の立柱が行われるので、信濃民部入道行然(二階堂行盛)を奉行として(中原)師員の屋形に御方違すべきかどうかについて審議が行われた。これは新御所が現在の御所(生西〔小山朝政〕の家)から真北に当たるので、明日は太白星の方角になり、一夜の御方違を行うためである。」<sup>註6</sup>とあり、新御所は小山朝政の車大路邸の正北にあることが分かる。

小山氏車大路邸は北条時頼邸の正南であり、その正北に新御所が建設されたことになる。これを示したのが図16である。

### 小山氏若宮大路邸

若宮大路の邸宅については嘉禎二年四月小四日条では「將軍家(藤原頼経)が御方違のため、小山下野入道生西(朝政)の若宮大路の家にわたられる事につい

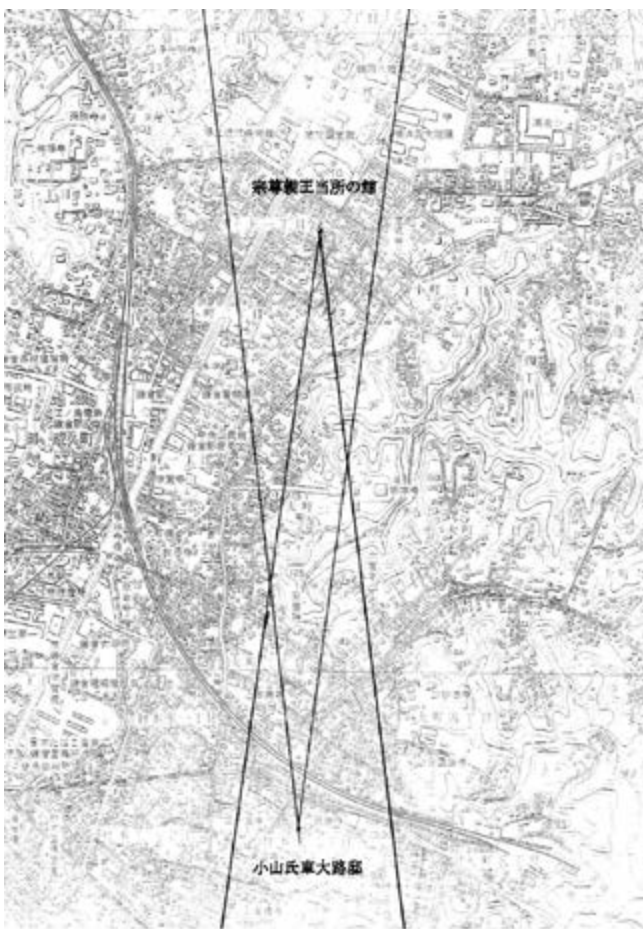


図16 小山朝政車大路邸正北・宗尊親王最初の御所の正南

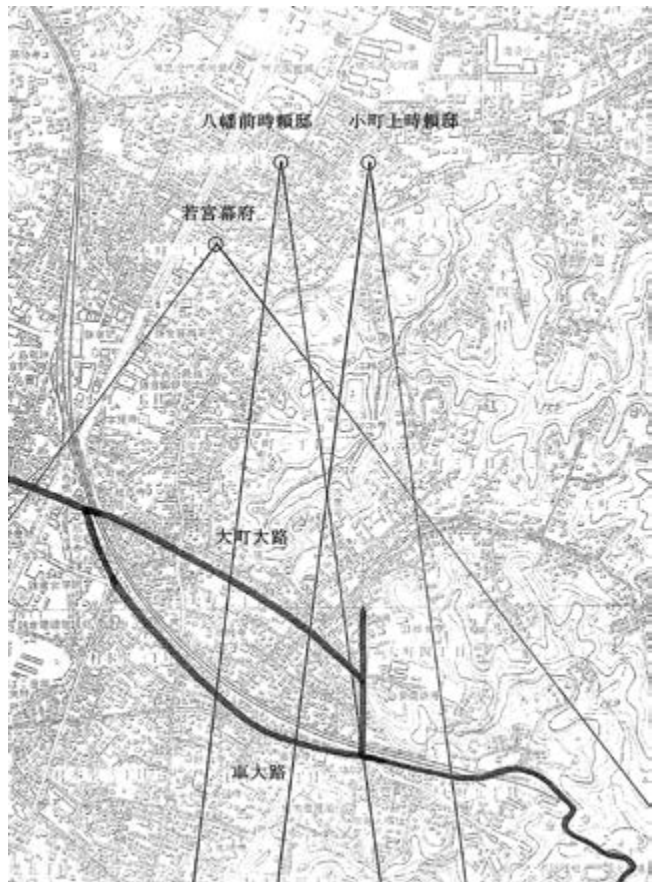


図15 宗尊親王当所の御所邸正南・若宮幕府南

て審議が行われ、(中略)その家は御所から坤に当たり、今日は太白星の方角ではないかと、頼経が直接御疑いを示された。晴賢らが丈尺を打ち計測したところ、丁の方角であると申したので、夜になって生西の家に渡られた。」<sup>註7</sup>とある。

嘉禎二年四月小四日条は起点となるのが御所となっているが、その場所が不明である。その場所を推定できれば小山氏の若宮大路邸を推定できるかもしれない。この記事の少し前、『吾妻鏡』嘉禎二年三月十四日条には將軍家の御行始があり、武州(北条泰時)邸に入られたとあり、また二十五日に頼経が田村に一泊する記事がある。その後二十日に幕府及び御持仏堂などを若宮大路の東側に新造することについて御所で審議が行われているが、その間、田村に方違した記事も、帰還した記事もないが、頼経が宇津宮辻子御所に帰られた記録はない。四月小二日には若宮大路御所の造営のための木作始が行われているから、御所造作の関係上また犯土との関係から、宇津宮辻子御所を離れ

て方違しているとみてよいであろう。そうであれば、嘉禎二年三月十四日条にある武州亭は泉ヶ谷北条氏邸である可能性はあるわけで、それを基に示したのが、図 17 である。この記事の場合、若宮大路を丁の方向に示すことができるのは泉ヶ谷にあった北条氏邸以外にないであろう。第 21 図で示される範囲のうち、若宮大路沿いと考えられる区域の中では鎌倉駅舎改築に伴う発掘調査で、当該時期に遡る遺物や東西桁行五間、南北梁行四間の掘立柱建物跡が発見されている<sup>註8</sup>。この建物は柱間が母屋 2.1~2.2m、北側 1.7m、南側に 1.8m の下屋を出したもので、三寸角の柱の痕跡が認められた。N-66° 30' - W で若宮大路の角度に近く、13 世紀前半には遺跡の形成が始まっていたと推定されている。当該建物の年代は上面の攪乱が激しく詳細には把握されなかったが、13 世紀代とされている。屋敷地の一画としてよい遺跡である。また JR 横須賀線ガードの西側付近がその範囲に入るが、江ノ電踏切近辺の発掘調査では長屋風の区画と建物跡が確認されている<sup>註9</sup>。

以上のように、『鎌倉市史 総説編』で小山氏の車大路邸と若宮大路邸は同一のものとされ<sup>註10</sup>、その見解が引き継がれてきたが、小山氏の車大路邸と若宮大路邸は別の場所に存在したのであり、車大路邸は材木座二丁目妙長寺の北側から JR 線路付近、若宮大路邸は若宮大路の西側鎌倉駅から下馬交差点北側付近と推定される別の場所にある邸宅であった。また、宝戒寺小町邸の正南からは若宮大路御所は正北にとらえることができないことが判明した。一方、若宮大路に面した八幡前の邸宅の正南からは若宮大路御所を正北にとらえることができ、宗尊親王は宝戒寺境内にあった小町邸ではなく、若宮大路御所の北にあった八幡宮前の北条時頼邸に入ることが分かった。

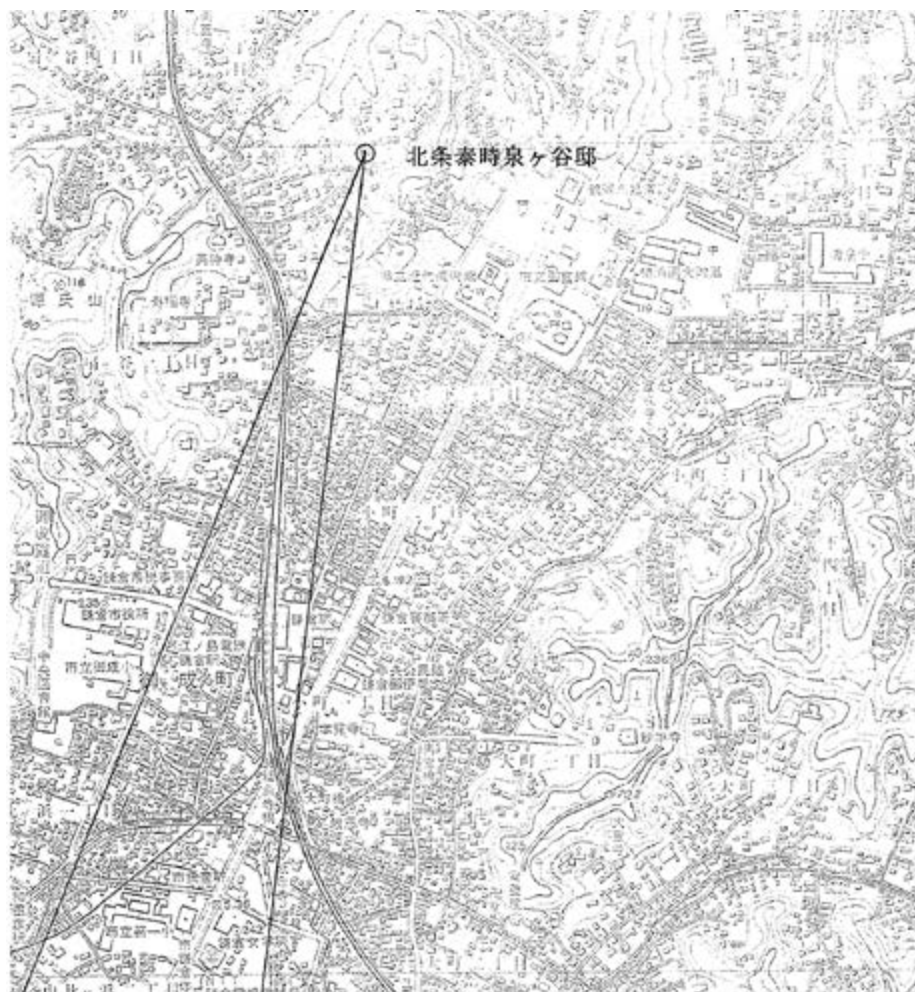


図 17 泉ヶ谷から丁の方向



## 5. 中原師員邸跡

先に小山氏車大路邸で『吾妻鏡』嘉禎二年（1236）六月二十六日条にふれた。これは小山朝政車大路邸が太白星の位置に当たることになるため、中原師員の邸に方違された記事である。口語訳では「明日、新御所の立柱が行われるので、信濃民部入道行然（二階堂行盛）を奉行として（中原）師員の屋形に御方違すべきかどうかについて審議が行われた。これは新御所（建造中の御所）が現在の御所（生西〔小山朝政〕の家）から真北に当たるので、明日は太白星の方角になり、一夜の御方違を行うためである。また本の御所（宇都宮辻子）から現在の御所は乾の方角に当たるのではないかとの御疑いを持たれ、方角を確認するよう行然に命じられた。そこで（安倍）忠尚・（安倍）晴賢・（安倍）国継が共に師員の家に向かい、丈尺を打ち、『乾の方角ではありません。』とそれぞれ申した。亥の刻に將軍家（藤原頼経）が御方違のために師員の屋形へ入られた。」<sup>註11</sup>とある。この記事は記述に乱れがあると思われるが、中原師員邸の位置が乾の方に当たるのではないかとの疑問が出され、その位置が乾の方ではないことを確認した記録である。「當時御所乾方歟之由」とあるが、「時」は「之」の写し間違いであろう。宇都宮辻子御所から乾の南、戌の方は若宮大路の西辺と寿福寺の境内、亥の方には『浄光明寺敷地絵図』（図8）に「刑部跡」として示される師員の曾孫にあたる攝津刑部権大輔親鑿（道準）の邸がその範囲に入る。師員から攝津氏の本邸として相伝されたのであろう。秋山氏はこの地を浄光明寺の敷地と考えているが<sup>註12</sup>、この記録は浄光明寺創建以前から將軍の方違に使用される位の広さを持つ中原（攝津）氏の館が当該地にあったことの傍証となろう。石井進氏は高坂・高坂地類について「ともに『跡』がなく、また『今所望』の朱筆のないことが注目される。つまりこの宅地の所有者高坂氏は、幕府滅亡の前後を通じて、この土地の所有者であり続けたということになろう。（中略）高坂氏は鎌倉幕府最後の時期、転身して反幕軍に投じ、鎌倉以来の所有地の維持、確保に成功したのではないだろうか。」と述べている<sup>註13</sup>が、高坂出羽守が元弘三年（1333）八月には笠置山攻撃の大將の一人として上洛しているから、早くから京都の高氏側の人間として活動し、この絵図が成立する以前に恩賞が与えられていたと考えてはどうであろうか。借地であったとすれば中原氏が地主であろう。当該地の北に隣接する藤ヶ谷入り口には師員の養子となった大友氏の居館があり、相伝されていることが分かっているから<sup>註14</sup>、「高坂」・「高坂地類」と「刑部跡」を合わせた位の大きさが將軍の方違の邸にふさわしい大きさなのではないだろうか。

なお、この地付近については武蔵大路周辺遺跡として過去3回の発掘調査が行われている。扇が谷二丁目297番4外の調査では、13世紀前半～15世紀にかけての7面の生活面を確認し、武蔵大路と考えられる道路跡やその側溝あるいは扇川と考えられる石組みの溝、板壁建物、井戸などが検出された。また15世紀には『浄光明寺敷地絵図』に描かれた地蔵堂道と考えられる道が現在より10mほど北にずれて幅2～2.5mで存在するという。

## 6. 泉ヶ谷（宗尊親王の方違えと北条重時泉ヶ谷邸）

『吾妻鏡』建長四年（1252）四月一日条によれば、宗尊親王は北条時頼邸に入り、そこを御所とされた。その場所は『吾妻鏡』の当日の記事と同年五月十七日条から現在の宝戒寺の場所とされているが<sup>註15</sup>、先に検討したように、これは鶴岡八幡宮前の北条時頼邸である。同五月小五日条には、御所造営による將軍の方違について陰陽師による審議が行われ、秋節に北の方角に御本所を設けられるように評定が行われた事が見える。西・乾ともに憚りはないとの意見であった。また、亀ヶ谷の方向を見定めるよう命じられたため、陰陽師らを引き連れて岩屋堂の後ろの山の上に上り、乾の方向に当たると一致して申した。

ちなみに岩屋堂の後ろの山は大倉御所から見て正西の方角に当たる。当時の鎌倉に居た陰陽師達にとっては

方角を見定めやすい場所であったろう。この記事でも方位の軸線は子午線であり、若宮大路を子午線とした場合は乾の方向に亀ヶ谷はとらえられず、巨福呂坂に相当する。この記事からも若宮大路軸線は成立しない。

ここで八幡前時頼邸から乾とされたことにより、中原師員邸は位置がかなり限定されることになる。岩屋堂裏山は浄光明寺の南側であり、その東側に接して北条得宗館と北条重時流の北条守時館があったことが『浄光明寺敷地絵図』に見えるから、その位置について調べられたものと考えられる。これを示したのが図 18 である。しかし、方位を示した図 18 では乾の方向は浄光明寺の敷地にあたる。ここには北条重時の館があったのであろう。次いで同十七日条には「將軍(宗尊)の御方違について評議が行われた。重時の邸宅を御本所に用いられるべきであるという。すなわち泉ヶ谷にある北条重時邸に方違されることになった。そうしたところ現在の御所〔時頼の御邸宅〕の西方の大將軍方角に当たり、憚りがあると(安倍)晴賢(中略)らが一致して申した。そこで出羽前司(小山)長村の車大路の邸宅に定められたという。」しかし、同十九日条には「御本所について(小山)長村の宿所はいくらか支障があるため、また陰陽道に尋ねられたところ、(安倍)晴賢以下が申した。『亀谷の泉谷にある右兵衛督(飛鳥井)教定朝臣の邸宅が現在の御所の北方であり、御本所に用いられるのによろしいでしょう。』そこで決定したという。このため、同二十六日条には「今日、右兵衛督(飛鳥井教定)の泉谷の邸宅を壊された。(宗尊)御方違の本所として新造されるためである」<sup>註16</sup>とある。すなわち、右衛門督(飛鳥井教定)の泉ヶ谷の邸宅は北条時頼邸(鶴岡八幡宮前)から見て北方になる。

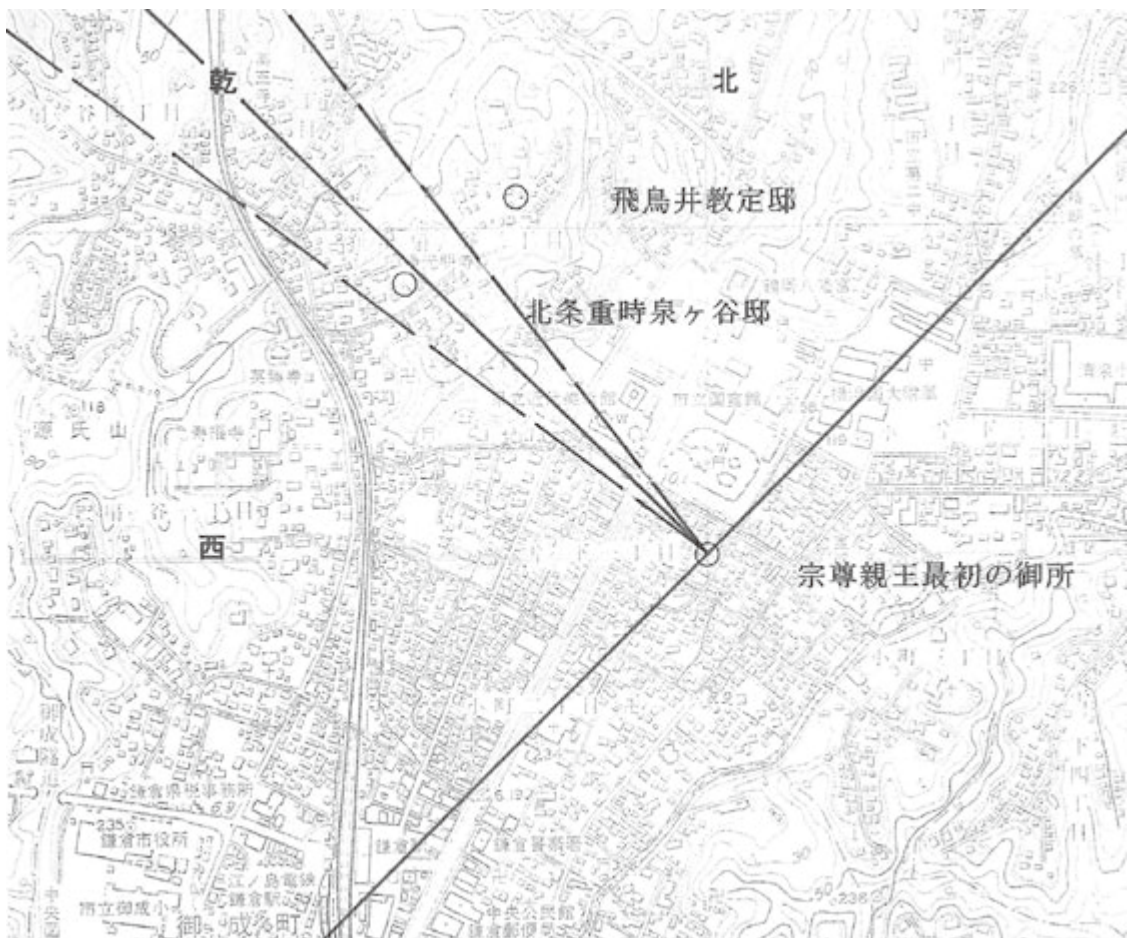


図 18 宗尊親王最初の御所の乾の西方

図 18 を見ると乾の方角に当たるのは浄光明寺を中心とした東西で、『浄光明寺敷地絵図』によれば東側には得宗館・北条守時館があった。守時は重時流であり、この時期には重時が住していたと考えられる。浄光明寺は開基が北条時頼と北条長時であるから、こちらにも敷地が広がっていたことであろう。そうすると泉ヶ谷北条重時邸は北条時頼の八幡宮前の館から見て敷地が西と乾両方にかかる可能性がある。このため憚りがあると なったのであろう。しかし、北方に方違されると決めたのに、西と乾共に憚りないとして乾の方に方違いすることを決め、さらに西方は憚りがあるとされ、南方の小山長村邸に変更し、ここも憚りがあるとすると北方の飛鳥井教定邸に決まった。記事に混乱があるのか、話の筋道が読めない。あるいは先に北条重時邸への方違が決ま っており、乾の方向に当たるが、乾は北方と西方の両方の性格を持つため、乾の西方領域を含む西・乾共に可とされたが、乾の西方は北方ではないので不可となって、乾の西方領域に含まれる北条重時邸が不可となったのであろうか。飛鳥井教定邸は泉ヶ谷の内、先の北条時頼邸の西方域に含まれず、北方域に含まれるとすると、北条重時流の業時創建と伝える多宝寺跡(現妙伝寺境内)より奥ということになるだろうか。

## 7. まとめ

『吾妻鏡』には方位に関する記事が散見するが、これは陰陽師やその知識のあるもの(神職や地相人と呼ばれる僧侶)の活動を示す記事である。その活動は1210年代から活発化するとされるが<sup>註18</sup>、将軍実朝の時代の後半期であり、承元三(1209)年四月十日従三位に上り、公卿に列せられたことによるのであろう。この段階での方位は「3. 北条義時『大倉本亭』と『当時館』」で述べたとおり、正南北(子午線)と考えられる。以降、陰陽師の方位は「1. 最明寺・永福寺・大慈寺の位置関係」で述べた如く、方位盤による通常の南北表示であり、陰陽師にとって若宮大路は方位軸線とはなっていなかった。

『吾妻鏡』の記事のうち、方位と起点が特定できるものについて検討を行った「1. 最明寺・永福寺・大慈寺の位置関係」では、大慈寺の中心は十二所字明石にあり、字丈六は北条政子の十三回忌に明王院脇に建立された丈六堂の地であることを考察した。大慈寺の方位関係から、薬師堂ヶ谷の中央東側を一つの候補として「壱岐前司佐々木泰綱の薬師堂ヶ谷の山荘」の位置を現覚園寺境内蓮華院跡付近と考察した。「2. 明王院の位置」では、起点となった「幕府」の地を名越朝時の弁ヶ谷の館と想定した。「3. 北条義時『大倉本亭』と『当時の館』」では、北条義時が小町・荏柄前のほかに泉ヶ谷と釈迦堂ヶ谷に館を構えており、釈迦堂ヶ谷の館が「大倉本亭」と呼ばれていたことを考察した。「4. 小山下野入道生西(朝政)邸」では若宮大路・車大路の邸が別の場所であることを考察し、候補地を検討した。また、建長四年に宗尊親王が鎌倉に入り、御所とした北条時頼邸は鶴岡八幡宮前の館であることも考察した。「5. 泉ヶ谷(宗尊親王の方違えと北条重時泉ヶ谷邸)」では、『浄光明寺敷地絵図』を参考に北条重時邸の存在と宗尊親王の方違えの記事の顛末の理由と右兵衛督飛鳥井教定の泉ヶ谷館の位置の推定を行った。

これらのことから、当時の方位表記が正確であることを確認した。これは当時の建築に反映された測量技術から見て相応の事と考えられる。

公卿になった者は方違が必要になる。それを踏まえた幕府の施設整備、すなわち泉ヶ谷飛鳥井邸等に見られるような御所として利用するための邸は特別な建築であり、特に本所とされる邸や方違いに用いられる邸は、本御所を中心とした方位のネットワーク上に存在するのであり<sup>註19</sup>、これも鎌倉における都市計画であろう。北条氏ほかの館の位置関係は方違用の御所とは別の館も亭主の所在地が問題にされることから、同様に本御所を中心とした方位のネットワーク上に存在したと考えられる。また北条氏は「鎌倉殿」と呼ばれるようになることから、独自の方位に基づく館のネットワークを形成していた可能性もある。今後の検討と諸先学の叱正を

期待したい。

- 註1 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡9 執権政治』2010年11月 吉川弘文館 137ページ
- 註2 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡13 親王将軍』2013年6月 吉川弘文館 128・129ページ
- 註3 註1前掲書 121ページ
- 註4 秋山哲雄『都市鎌倉の中世史 吾妻鏡の舞台と主役たち』2010年8月 吉川弘文館 82～84ページ
- 註5 長勝寺遺跡発掘調査団編『長勝寺遺跡』1978年10月 かまくら春秋社
- 註6 五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳 吾妻鏡10 御成敗式目』2011年5月 吉川弘文館 126ページ
- 註7 註6前掲書 122～123ページ
- 註8 『蔵屋敷遺跡 日本国有鉄道鎌倉駅舎改築に伴う鎌倉市小町所在遺跡の調査』1984年2月 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会
- 註9 『神奈川県・鎌倉市 若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 鎌倉駅西口第2自転車駐車場及び(仮称)鎌倉市住宅福祉サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書—鎌倉市御成町868番地点』1993年7月 鎌倉市教育委員会
- 註10 高柳光寿「第十二章 鎌倉市街の人的構成—御家人らの住居」『鎌倉市史 総説編』鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館 1959年10月初版発行 1972年10月三版発行 321ページ
- 註11 註6前掲書
- 註12 秋山哲雄『鎌倉を読み解く』「第三章 都市の地主—〈浄光明寺敷地絵図〉にみる中世鎌倉の寺院—」84～85ページ
- 註13 石井 進『浄光明寺敷地絵図』に記された人物は誰か『浄光明寺敷地絵図の研究』大三輪龍彦編 2005年7月 新人物往来社 36ページ
- 註14 伊藤一美「野津本『北条系図・大友系図』の書写場所と鎌倉亀ヶ谷郷雪下屋形」『鎌倉』第111号 鎌倉文化研究会 2011年7月
- 註15 宗尊親王が入御した北条時頼邸を高柳光寿氏(『鎌倉市史 総説編』前掲註i)・貫達人氏(「北条氏邸趾考」『金澤文庫研究紀要 第八号』1971年3月 神奈川県立金沢文庫)は小町大路の東西何れかを判断していないが、秋山哲雄氏は現宝戒寺の地としている。(秋山哲雄 前掲註12 83ページ)
- 註16 註2前掲書 129ページ
- 註17 註16
- 註18 赤澤春彦「鎌倉幕府と陰陽師」『中世の人物●京・鎌倉の時代編「公武権力の変容と仏教界」』平雅行編 清文堂出版 2014年7月、木村進「鎌倉時代の陰陽道の一考察」『陰陽道叢書 2 中世』村上修一等編集 名著出版 1993年6月 など
- 註19 方違に用いられた館の具体的事例が今小路西遺跡(鎌倉市立御成小学校校庭)の北谷3B面の遺構群であり、北谷は北条政村から政長へ引き継がれた館である。特に北谷3B面で検出された遺構群は、将軍御所として造営されたと見てよいだろう。また、ここでは六角井が検出されている。同様の井戸は、筆者が大倉御所と考えている二階堂字荏柄38番2地点でも13世紀後半頃の遺構として検出されており、類似性を指摘できよう(「1. 大倉幕府周辺遺跡群(二階堂字荏柄38番2地点)」『鎌倉の埋蔵文化財17』鎌倉市教育委員会 2014年3月 所収)。